

カンボジアにおける参加型実践の教育的意義

— 参加学生にとっての「経験の意味」を手がかりに —

藤岡 恭子 / 伊藤 嘉人

はじめに

1. 「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」について
2. 参加学生の経験を通じた学び
3. 結語—学生にとっての「経験の意味」の考察—

はじめに

本稿の目的は、「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」(以下、「カンボジア・プロジェクト」)の教育的意義を、参加学生にとっての「経験の意味」に着目して検討することにある。ここでいう「経験の意味」という概念は、デューイが提起する次のような哲学に依拠している。第1に、デューイによれば、「教育」を「経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を拡大させるように経験を再構成ないし再組織することである」(傍点：引用者)¹⁾と定義している。第2に、デューイのいう「経験の連続性の原理」とは、「以前の過ぎ去った経験からなんらかのものを受け取り、その後に行ってくる経験の質を何らかの仕方で修正するという両方の経験すべてを意味する」(傍点：引用者)としている²⁾。第3に、「実験的・協働的知性」(experimental and cooperative intelligence)³⁾を育むことにより、「連携的な生き方」(associated living)⁴⁾としての民主主義を探究することである。

本稿では、こうしたデューイの理論に依拠しながら、「カンボジア・プロジェクト」へのK大学の参加学生にとって、1) どのような「経験」を通じた「学び」があり、2) どのような「経験の意味の再構成」がなされたかを、参加学生の記述データを基に分析していくことを課題とする。そこで以下では、まず、1) 「カンボジア・プロジェクト」の趣旨と概要を記し、2) 参加学生にとっての「経験の意味の再構成」過程を探っていく。

(藤岡恭子)

1. 「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」について

(1) プロジェクトの課題意識

本プロジェクトは、山口大学国際戦略室による国際協力活動推進プラットフォームにおける海野らを中心とした国際教育協力推進活動の実践研究成果から開発されたものである。以下の3次に渡るカンボジアにおける課題探索的調査から本プログラムが創造された⁵⁾。

2011年3月に実施された第1次の調査では、「日本の現行の体育(教育目的・教育内容・教育方法)をそのままカンボジアに持って行ったとしても決して効果を上げることはない。同時にカンボジアの生活現実に根ざした体育(=生活体育)の可能性を探っていく必要性を痛感した」。2011年12月の第2次の調査では、「①日本の学校体育のイメージをそのままカンボジアに持ってきても決して効果を上げることはできない、②カンボジアの現状(当事者の必要と要求)にマッチングした体育=生活体育の可能性を探っていくことが必要である」。そして、2012年3月・4月の第3・4次の調査では、「カンボジアの現状にマッチングした体育=生活体育」の具体化に向けて、以下の5点からなる基本方針を立てた。①いきなり『体育授業を実践しよう』などと、学校と教師に求めない。(体育の必要と意義について、教師と子どもたちに感得してもらうことを優先する) ②現地の実情に合った(「それならやってみよう」と納得の得られる)体育を構想する。③背伸びをしなくても取り組める体育を構想する。④やってみて徒労感でなく効力感の得られる体育を構想する。

このような第4次に渡る、カンボジアの学校教育における課題探索的調査から、本プロジェクトは、5つの支援方略を明確にした⁶⁾。第1は、「①横の線を意識した支援」である。活動する学校を拠点に支援を広げていく。第2は、「縦の線を意識した支援」である。活動対象地域には、現地の教員養成を視野に入れて、継続的に活動をする。第3は、「現地の自立を意識した支援」である。カンボジアの現状にマッチングした支援を行い、将来的には、現地の高学年児童および教職員集団が自主運営できるように支援する。これら3つの方針を「Education for All」とした。

第4には、支援の趣旨に賛同する全国の大学が協力し合い、活動の幅を広げていく「大学間連携を意識した支援」を計画した。そして第5は、「学生の成長(意識変容)を意識した支援」とした。具体的には途上国への教育支援ボランティア活動が、学生の成長に対して持つ可能性として①弱者の側に立ちきる志向性を確立する契機となる。②教育の原点、または原理・原則に直に触れる。③観が揺さぶられ、経験に裏打ちされながら(再)構築していく契機となる。④社会的諸関係の中の自己の存在を実感できる。⑤職業的に社会化していく上で必要なライフ(社会的)スキルを鍛え合う。⑥全員参加型のイベントを企画・運営する力を育む契機となる。⑦効力感と自己肯定感を深く味わえる。これら第4・5の支援方略を「大学・教育」とした。

このように、本プロジェクトは、2011年から現在まで第12期にわたって継続的・発展的に展開されてきた。現在では、スポーツ教育学を共同研究している研究者の協議会である、「The Association of Sport and Physical Literacy Education for All(以下、SPLE と略す)」における「教育部門」の SPLE 国際教育協力学生ボランティアズ (ICVs) の実践として位置づけられている。

つまり本プロジェクトの課題意識は、効率の良い運動文化祭やパッケージ化された支援ではなく、現地の子どもたち、教員、地域に寄り添った支援のあり方を模索しながら継続して活動を続けられてきた⁷⁾。本稿におけるカンボジア渡航後の学生の記述は、本プロジェクト11期目の活動にK大学として初めて参加した経験によるものである。

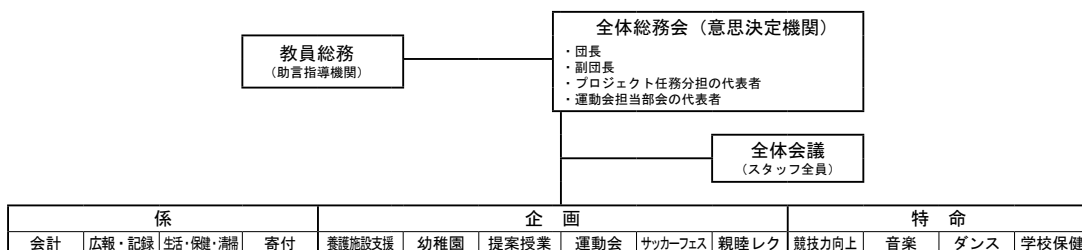
(2) プロジェクトの組織体制とカンボジアにおける実際の活動

本プロジェクトは、SPLE に所属する教員総務が、活動拠点となるカンボジア・ラオスの実地調査や現地の学校と協議をしながら、活動の核となる方針、年間計画や渡航プログラム、訪問校を決定し、学生の主体的な活動を支えている。プロジェクトの活動は、学生による自治的運営を基本方針とされ、渡航前の企画立案・運営・総括は、学生に委ねられている。

プロジェクト第11期の組織体制は、図1の通りである。プロジェクトの意思決定のプロセスにおいて、方針・基本計画の策定については、全体総務会にて基本的に決定される。代表者会議では、細案の策定と担当体制の整備が行われる。そして、係・各部会等では詳細案を策定される。第11期にカンボジアに渡航した大学は、関東・中部・近畿・九州の計10大学63名が参加した。63名の学生には、それぞれ任務分担があり、渡航前より所属大学だけでなく、他大学の学生ともFacebookなどのソーシャルメディアを活用し、協議しながら進めていった。また、全国の大学の代表者が参加しての全体会議や、地域に分かれての会議や勉強会も行った。

実際のカンボジアでの活動については、表1・表2に示すようにカンボジアの北部のオドメンチェイ州(34名)とシェムリアップ(29名)に分かれ活動した。それぞれの活動スケジュールは表1・2の通りである。

図1 第11期プロジェクトの組織体制



出所：海野(2012)を元に伊藤が作成

表 1 第 11 期プロジェクト 北部班の活動

日程	午 前		午 後		放課後
	主活動	特命	主活動	特命	競技力向上特命
12月3日(月)	●チョンカル小学校にて 打ち合わせ (校長と懇談, 教室, 運動場, 用具の確認)	●チョンカル小学校 提案授業 (ダンス)	●企画別会議 ●オスマニック第二小学校, スナルパット小学校訪問		
12月4日(火)	●チョンカル小学校提案 授業 (図画工作, 音楽, 体育) ●チョンカル中学校提案 授業 ●チョンカル幼稚園提案 保育 (誕生会)	●チョンカル小学校 提案授業 (ダンス)	●企画別会議 ●運動会会議 ●スワイトム, チョーク, バンティエトマイ小学校訪問		
12月5日(水)	●チョンカル小学校提案 授業 (図画工作, 音楽, 体育) ●チョンカル中学校提案 授業 ●チョンカル幼稚園提案 保育 (表現遊び)		●ICVS 親睦レクリエー ション ●人工湖畔清掃 ●運動会会議		●サムロン小学校 (バレーボール, サッカー, 水泳)
12月6日(木)	●コークモーン小学校提 案授業 (運動会リハーサルを兼 ねた体育) ●コッココ小学校提案授業 (運動会リハーサルを兼 ねた体育) ●バンティアンビル中学 校訪問 (交渉・測量)		●児童養護施設訪問 ●運動会会議		
12月7日(金)	●コークモーン小学校運 動会 (バンティアンビル市教員 研修会) ●コッココ小学校運動会		●シエムリアップへ移動		
12月8日(土)	●アンコールワット観光 ●養護施設 Home of Joy 訪問				

出所：2018年 第11期「生活のしおり」を元に伊藤が作成

表2 第11期プロジェクト シェムリアップ班の活動

日程	午 前		午 後		放課後
	主活動	特命	主活動	特命	競技力向上特命
12月3日（月）	●スワイトム小学校交流会				●スワイトム中学校 (バレーボール)
12月4日（火）	●アンコール中学校提案 授業 (サッカー、体づくり運 動)			●ワットポー小学校 提案授業 (器械体操)	
12月5日（水）	●小学校サッカー交流戦 (ストゥマイ小, サバイ ドンクン小, チェシム小)		●シェムリアップ河畔清掃	●ワットポー小学校 提案授業 (器械体操)	
12月6日（木）	●ワットムナ小学校提案 授業 (図画工作, 音楽, 体育)	●ワットポー小学校 提案授業 (器械運動) ●サバイドンクン小 学校提案授業 (合唱・合奏)	●児童養護施設 Sunrise 訪問 (文化交流会)	●ワットポー小学校 提案授業 (器械体操)	
12月7日（金）	●アンコール幼稚園提案 保育 ●ピピアチャム小学校提 案授業 (図画工作, 体育)	●サバイドンクン小 学校提案授業 (合唱, 合奏)		●ワットポー小学校 提案授業 (器械体操)	
12月8日（土）	●アンコールワット観光 ●児童養護施設 Home of Joy 訪問				

出所：2018年 第11期「生活のしおり」を元に伊藤が作成

(伊藤嘉人)

2. 参加学生の経験を通じた学び

さて、参加学生は、どのような学びがあったのか。その「経験の意味」⁸⁾を探るために、「カンボジアツアーに参加して、私が学んだこと」と題して、K大学の参加学生6名から、「学んだことの3つのテーマ」を任意に設定して自由記述のレポートを提出してもらった⁹⁾。得られた記述データを基に、コード化・カテゴリー分けを試みた。なお、コーディング作業にあたっては、MAXQDA Analytics Pro 2018(Release 18.1.0)を使用した。

(1) 記述結果の概要

1) 自由記述における学んだことの「3つのテーマ」

表3は、参加学生6名(A～F)それぞれの「学んだこと」として挙げられた「3つのテーマ」を原文のまま、一覧にしたものである。

表 3 「学んだこと」の3つのテーマ一覧

学生	テーマ①	テーマ②	テーマ③
A (シムリアップ)	計画の重要性	伝えることの難しさ	教材と向き合う事・教材研究
B (シムリアップ)	体育・教科外の授業の必要性	他大学参加学生との協同と対話	ボランティア・貧困についての意見を持つこと
C (シムリアップ)	人との関わりについて	自分自身の経験について	体育の授業に関すること
D (北部)	現地での教育活動における子どもとの関係構築	他大学参加学生との対話と協働	子どもたちとの関わりを通じた自分自身の経験
E (北部)	学生が主体となって活動することの意義	現地に行くことの意義	ボランティア活動の形
F (北部)	情報共有の大切さ	現地の子供たちに伝えることの難しさ	困難を乗り越えた喜び

注1：A～Fは、K大学参加学生6名である。A～Cは（シムリアップ班）、D～Fは（北部班）と、現地における滞在地・活動が、二手に分かれて行われた。

注2：「テーマ名」および、テーマ①②③の順序性は、各自の原文のままである。

出所：参加学生6名よりの自由記述レポートを元に、藤岡恭子作成。

表3のとおり、参加学生の自由記述から、テーマのみを抽出すると、単純に、18テーマ（3つのテーマ×6人分）が挙げられる。各学生による「テーマ①～③」の設定とその順序性、「テーマ③」のまとめから、各自の学びにおける一定のストーリーがみられるだろう。しかしながら、必ずしも、挙げられたテーマに即した内容が記述されているわけでもないため、テーマのみでは学生相互における意味内容の関連性はみえにくい。そこで、次に、各自による記述データを基に、コーディングを行い、カテゴリ分類を試みた。

2) 記述データに基づくカテゴリ分類

記述データをコーディングした結果、表4のように、「実践的課題」と「理論的課題」に関するテーマ6つに分類することができた。そこで次節からは、表4の「6分類」を章立てに用いて、記述内容を詳述していく。

表 4 参加学生が「学んだこと」の6分類

実践的課題	1. 現地の子どもに伝えることの難しさ	2. 異文化の中での水泳指導を通して学んだこと	3. 体育・教科外教育の必要性
理論的課題	4. 渡航前の準備段階で大切なこと	5. 他大学の学生との協働を通して学んだこと	6. ボランティアの意味の再構築

出所：参加学生6名よりの自由記述データに基づき、藤岡恭子作成。

(2) 参加学生の経験を通じた「学び」—実践的課題—

表4のように、参加学生の経験を通じた「学び」は、大きく、次の3つの実践的課題を提起している。1) 現地の子どもに伝えることの難しさ、2) 異文化の中での水泳指導を通して学んだこと、3) 体育・教科外教育の必要性である。

1) 現地の子どもに伝えることの難しさ

第1の実践的課題「現地の子どもに伝えることの難しさ」に関して、表5は、「伝えることの難しさ」という小テーマを掲げた2名の記述を示し、筆者による「学びの過程」を付したものである。

表5によれば、シムリアップ班のAと北部班のFに共通する「学びの過程」がみとれる。①まず、言葉の壁が立ちただかり、②その中での意思疎通の難しさがあり、③言葉の壁を乗り越える努力・工夫を通して、④学んだことが記されている。

ここで重要な点は、言葉の壁を乗り越える努力・工夫として、「体を大きく使ったジェスチャーや、一生懸命伝えたい、また聞きたいという態度など」、「最初は言葉だけで説明していたものが、一回デモンストレーション（見本）を見せることで、効果的に効率よく伝えることができるようになってきた」という具体的な提案である。両者に共通して、「言葉」だけでなく、体全体を使った「ジェスチャー」や「デモンストレーション」、そして、「一生懸命伝えたい、また聞きたい」という思いを、五感を通して相手に「伝えようとする」意義が示されている。さらに、Aによれば、日本の教育現場における応用可能性を論じている。これらは、実践における「行為の中の省察」¹⁰⁾から生み出された、新たな方法論を提起している。

表5 現地の子どもに伝えることの難しさ

学びの過程	A（シムリアップ）：「伝えることの難しさ」	F（北部）：「現地の子供たちに伝えることの難しさ」
①言葉の壁	・言葉の通じない異国の地で単純なことを伝えるのにも、 <u>現地の言葉が使えなければ難しい。</u>	・活動をするにあたって <u>言葉の壁が一番大きく立ちただかり。言葉がわからないと、スムーズな活動をするのが難しい。</u>
②言葉の壁がある中での意思疎通の難しさ	・その中で今回は授業を行うということで、 <u>自分たちが考えている意図を、現地の子どもたちに伝えることが難しかった。</u> ・どうしても言葉が使える通訳さんに頼ってしまう場面があり、自分たちから発信していくことができなかった。	・また、 <u>私たちが教えたいことを子供たちが間違って理解することもあるし、子供達の訴えも理解してあげることができないこともある。</u> ・日本人同士の会話でも、アイコンタクトを取ったり、話すスピードを調整したり、抑揚をつけている。それらができない中での会話は難しく、大変であった。
③言葉の壁を乗り越える努力・工夫	・最初は言葉だけで説明していたものが、 <u>一回デモンストレーション（見本）を見せることで、効果的に効率よく伝えることができるようになってきた。</u>	・簡単な単語は覚えていても、それでは会話はできない。 <u>体を大きく使ったジェスチャーや、一生懸命伝えたい、また聞きたいという態度など、現地の子供たちと話すうえで自然と身についていた。</u>
④学んだこと	・これは実際の日本の教育現場でも言えることで、 <u>長々とした説明よりも、一回見本を見せれば済む</u> といった場合がある。特に体育の実技の場面では活用できると感じた。	・また、 <u>大きな画用紙に事前に書いて読んでもらう</u> などすると伝わりやすい。 ・伝えることに関して、 <u>こんなにもいろいろな手段がある</u> ことを改めて感じた。

出所：A「伝えることの難しさ」、F「現地の子供たちに伝えることの難しさ」の自由記述を元に、藤岡恭子作成（下線および「学びの過程」：筆者）。

2) 異文化の中での水泳指導を通して学んだこと

第2の実践的課題として、表6は、北部班で行った「異文化の中での水泳指導を通して学んだこと」に関する記述を示し、筆者による「学びの過程」を付したものである。

表6によれば、まず、①カンボジアの子どもたちの様子―「泳ぐこと」のイメージの違いが描写されている。「水着などは持っておらず、…服のままで泳ぎ、着替えず濡れたまま帰宅する」、「泳ぐ場は川や池であり、目的は食料調達や暑さしのぎ」であり、「近代泳法の文化のない子どもたち」の状況が描写されている。

こうした状況に合わせて、②「命を守る水泳法」指導へと変更した経緯が示されている。「私たちが教えるべきことは何なのかを考え直し、話し合った結果、事前に決めた活動内容をすべて変更し、指導案をすべて練り直す結果となった」とする（傍点：引用者）。3日間の実践を終えて、③残された課題としては、1) 異文化の中で新たな文化を創り出すにはもっと時間が必要、2) 通訳を介した文化の伝達は、うまく伝わりきらない部分があること、3) こちらの意図と子どもたちの思いとのずれがあったこと、などが挙げられている。

表 6 異文化の中での水泳指導を通して学んだこと

学びの過程	D (北部)「現地での教育活動における子どもとの関係構築」	F (北部)「日本とカンボジアの泳ぐことの違い」
①カンボジアの子どもたちの様子―「泳ぐこと」のイメージの違い	<ul style="list-style-type: none"> 近代泳法の文化のない子どもたちに宿泊施設の横にプールができたからという理由で指導をしてみようという目的で今回の渡航から始めての挑戦となった。 普段池や川などで泳いで遊んでいる子どもたちにとって高いお金を払ってでしか遊ぶことのできないプールに無料で使用することができるといっただけで気持ちが高ぶってしまっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 水着などは持っておらず、普段来ている服でプールまで来てその服のままで泳ぎ、着替えず濡れたまま帰宅するのが当たり前で、泳ぎ方も普段の生活で食料調達するために独自の泳ぎ方を習得している子供たちが多かった。 カンボジアでは、プールがあまり無く、使用料も高額であるため、わざわざプールに訪れる人は少ない。そのため、泳ぐ場は川や池であり、目的は食料調達や暑さしのぎである。
②現地の子どもの状況に合わせて、「命を守る水泳法」指導へと変更	<ul style="list-style-type: none"> そんな子どもたちにいかに水は危険ということを知ってもらうために泳ぎの説明をする前は必ず笛を鳴らして「今から大切なお話をします。」ということを意識付した。 当初の目的は、近代泳法につなげる泳ぎとして「ドル平」の指導を考えていた。しかし、現地の子どもと触れ合う中で、池や川などで泳いでいる子どもたちに、顔を付けて長く泳ぐ泳法を教えてしまったら、衛生面を考えた時に危険なのではないかと思い、急遽、「命を守る水泳法」に変更した。ペットボトルを使用しての救命の指導や顔を付けない水泳法を指導した。 	<ul style="list-style-type: none"> これらがわかったのも、実際に現地の子供たちに会って話した時であり、私たちが教えるべきことは何なのかを考え直し、話し合った結果、事前に決めた活動内容をすべて変更し、指導案をすべて練り直す結果となった。 担当の4人で夜中まで指導案を考え直し、それでも決まりきらなかったら特命の時間ギリギリまで意見を出し合い、納得いくまで考え直した。その日々が続いて活動を終えたとき、とても達成感が生まれた。しかし、うれしかったのは私たちだけで、課題も残る結果にもなった。
③残された課題：1) 新たな文化の創造には時間が必要、2) 通訳を介した伝達の限界性、3) 授業者の意図と、子どもたちの思いとのずれ	<ul style="list-style-type: none"> まったく文化が違うため世界にはこういうモノもあるのかということを知ってもらうことしか三日間ではできなかった。新たな文化になるまでにはもっとたくさん時間が必要。 通訳さんを通して子どもたちに自分たちの伝えたいことを伝えてもらっていたけれど通訳さん自身も経験が無いので、子どもたちにうまく伝わりきらない部分が多く感じられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 全授業が終わった後子供たちに楽しかったかを聞いたら、半分ほどが微妙な反応を見た。私たちが良かったと思って行った授業と、子供たちがなぜこの特命に参加しているのかという想いにズレがあった。 事前に行うことのできる実態調査はしておくべきことであつたし、実際にきた子供たちの状況を素早く把握し、子供たちの能力に合った活動を提案する応用力が大切であることが身に染みた。

出所：D「現地での教育活動における子どもとの関係構築」、F「困難を乗り越えた喜び」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および「学びの過程」：筆者）。

3) 体育・教科外教育の必要性

第3の実践的課題として、表7は、シェムリアップ班で活動した学生による、①「教材と向き合う事・教材研究」、②「体育の授業に関する事」に関する記述を示し、筆者による「学びの過

程」を付したものである。

表 7 教材研究の重要性—省察と改善の繰り返し—

学びの過程	A「教材と向き合う事・教材研究」	C「体育の授業に関する事」
①指導案における、現地の状況に合わせた再構成	<ul style="list-style-type: none"> 教材研究の重要性を学んだ。…自分たちの意図を伝えることは難しく、複雑な授業内容にしてしまうと混乱を招く可能性があった。 授業担当は体作り運動で、大縄を担当した。授業をするうえで、教材研究が欠かせないことは日本の教育現場では当たり前のことであるが、自分たちにはその能力が足りなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 現地の子どもたちや先生に体育の授業をする際、言葉が通じない、道具がない、環境が整っていない、予定と違うことが起きるといったような状況が日々ありました。 しかし、それは工夫次第でなんとでもなり、臨機応変に対応する力をつけることができました。 つまり、体育の授業を行う際に、道具や環境といった要因は重要になってくる。しかし、必ずしもすべての環境が整うわけではない。 そういった際に、ボランティアで得たスキルをうまく活用し、授業を行うことができると感じた。 現地の子どもたちから得たものがあり、道具一つで幾つもの運動や遊びをしていました。今あるものだけではなく、想像力を豊かにし、様々な取り組みを実践してもよいのではないかと感じる事ができた。
②授業のねらいは何か、そのためにどのような活動を組み立てるか。	<ul style="list-style-type: none"> なぜ大縄なのか、なぜこの練習メニューなのかに一貫性を持ってない授業内容になってしまった。例えば、大縄を指導するうえで、縄を回す人が重要になってくるわけであり、跳んでもらう回し方ではなく、跳ばせる回し方をしなければならない。二つの違いは難しく、まずは回し練習が必要だと指摘を受けた。確かにその通りだと思った。私たちに教材研究が足りてなかったことに気付いた。教材研究に終わりではなく、…反省と改善の繰り返しであることを学んだ。 	
③学んだこと—省察と改善の繰り返しの重要性		

出所：A「教材と向き合う事・教材研究」、C「体育の授業に関する事」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および「学びの過程」：筆者）。

表 7 では、シムリアップで、同じ教育活動を担当した A と C の実践を通じた振り返りが記述されている。A の記述によれば、①事前準備としての指導案を綿密に練ること、②現地の状況に合わせた再構成が必要であること、授業のねらいは何か、そのためにどのような活動を組み立てるか、③省察と改善の繰り返しの重要性が指摘されている。C によれば、「言葉が通じない、道具がない、環境が整っていない、予定と違うことが起きるといったような状況」に直面したが、「臨機応変に対応する力をつけることができた」とする。他方、現地の子どもたちは「道具一つで幾つもの運動や遊びをして」おり、翻って、われわれもまた、「今あるものだけではなく、想像力を豊かにし、様々な取り組みを実践」するプロセスの意義が提起されている。

③体育教育・教科外教育の必要性

表 8 は、同じくシムリアップでの実践を通して「体育・教科外の授業の必要性」を発見した

表 8 体育・教科外の授業の必要性

B「体育・教科外の授業の必要性について」	要約
<ul style="list-style-type: none"> カンボジアでの教育支援活動に参加し、学んだことの1つ目は、<u>体育・音楽などの教科外の授業の必要性を確認できたこと</u>だ。大学の各講義で体育の授業、教科外の授業について様々な視点から考察し、実践的な知識を身につけることができてきたと感じていた。 カンボジアでのボランティアでは、<u>大学の講義を受けるだけでは考えることのない環境やその機会があらこちらに点在している</u>。 その中で、最も感じる事ができたのが、「<u>体育</u>」そのものが持つ<u>価値</u>についてであった。 現地では、<u>体育・音楽の提案授業</u>を行い、どの授業でも子どもたちが必死に取り組み楽しんでいる様子を見ることができた。 <u>体をうまく動かすこと、仲間を応援すること、協力して目標を達成すること</u>。これらを含む日本の<u>体育は、単に身体をつくることだけでなく、心の成長や社会的な成長の礎</u>になっている。カンボジアでの活動を通して強く感じ、考え学ぶことのできた1つである。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 体育・音楽などの教科外の授業の必要性 2. これまでの大学の講義を受けるだけでは考えることのない環境・機会が点在 3. 「体育」そのものが持つ価値 4. 日本における体育教育の教育的価値を再発見

出所：B「体育・教科外の授業の必要性」の記述を元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

とする記述データを示し、筆者による「要約」を付したものである。

表 8 によれば、「体育・音楽などの教科外の授業の必要性を確認した」として、1) これまでの大学の講義を受けるだけでは、考えることのない環境・機会が点在していたこと、その中で、2) 「体育」そのものも価値を感じることができたこと、3) これらを通して、日本における体育教育の教育的価値を再発見したとする。ここで、「体をうまく動かすこと、仲間を応援すること、協力して目標を達成すること。これらを含む日本の体育は、単に身体をつくることだけでなく、心の成長や社会的な成長の礎になっている」として、日本における体育教育の教育的意義に言及している点が注目される。

(3) 参加学生の経験を通した「学び」－理論的課題－

さらに、参加学生の経験を通した「学び」は、次のような3つの理論的課題を提起している。1) 渡航前の準備段階で大切なこと、2) 他大学の学生との協働を通して学んだこと、3) ボランティアの意味の再構築である（前述表 4 参照）。

1) 渡航前の準備段階で大切なこと

第 1 の理論的課題「渡航前の準備段階で大切なこと」に関して、①「計画の重要性」、②「情報共有の大切さ」の2つの観点から、意味内容を検討していく。

① 計画の重要性

表 9 は、シェムリアップ班で活動した A による自由記述を示し、筆者による「要約」を付したものである。

表 9 計画の重要性

A（シェムリアップ班）の自由記述より	要約
<ul style="list-style-type: none"> ・カンボジア渡航で学んだことの第一は、<u>渡航前段階</u>における<u>計画の重要性</u>である。 ・本学自体がプロジェクトに初参加ということで、他大学に比べ知識もなく、<u>準備が遅れがち</u>であった。 ・実際に渡航してからでもなんとかなるであろうという甘い考えもあったこともあり、授業の準備も進みが悪かった。 ・そのせいか、授業当日でも予期せぬ事態にバタバタしてしまう状況も生まれた。 ・この計画、準備のプロセスは学校教育に関わらず多くの場面でこれから必要になってくる。特に学校教育では、<u>授業の際、指導案を作り計画を練る</u>。良い計画からしか良いアドリブは生まれぬものである。 ・授業が終わり、毎日夜に反省会と次の日に向けての計画を夜遅くまで会議する。そういった PDCA サイクルにおける他大学の準備、計画レベルの高さから、学べた物は多くあった。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 初参加で、他大学より知識不足、準備が遅れがち 2. 授業当日に予期せぬ事態に遭遇 3. 学校教育における計画・準備の重要性 4. 授業後の反省会と翌日の計画の再構成

出所：A「カンボジア渡航まとめ」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

表 9 によれば、1) 事前の「計画、準備のプロセス」が、いかに重要であり、授業実践の成否への影響が指摘されている。そして、2) 学校教育において、事前に指導案を綿密に練ることの重要

性が指摘されている。さらに、3) ひとたび作成した指導案が、それで完結ではなく、「授業が終わり、毎日夜に反省会と次の日に向けての計画を夜遅くまで会議」したとして、授業後の振り返りと指導案の再構成過程の意義が指摘されている。これら一連の「PDCA サイクル」において、参加学生どうしの意見交換の中から、多くのことを学んだとしている。

② 情報共有の大切さ

渡航前の準備段階で求められることの2つめは、「情報共有の大切さ」である。表 10 は、北部班で活動した F による自由記述を示したものである。

表 10 によれば、1) 情報共有の手段としての Facebook の活用、2) 渡航前における情報収集および収集内容の把握、3) 前日までに、不明点は担当に問い合わせて理解し、情報共有を密にしておくこと、4) 全国学生が集まる会議に臨む際、自身の主体性が大切であることが指摘されている。

表 10 情報共有の大切さ

F（北部班）の自由記述より	要約
<ul style="list-style-type: none"> ・カンボジアボランティアは関東から沖縄まで、全国各地の大学生が活動に参加している。…全員が集まって話し合うことは出来ないため、<u>情報共有の手段として、主に Facebook が活用されている。</u> ・活動にあたっての注意事項や、各大学の近況報告、指導案など、<u>すべて文字に起こしてアップしなければならない。</u> ・特に渡航前、毎日のように多量の情報がアップされるものをすべて確認し、把握していかなければならない。 ・集まって打ち合わせできるのは、現地での会議のみ。前日までに自分の担当でない活動内容も理解し、<u>わからないところは、担当の人に確認を取らなければならない。また担当の人は、自分がどういう活動にしたいのかという想いを全員に伝えなければならない。</u> ・そうする上で、しっかりと情報共有しておかなければ、活動をスムーズに行うことができないし、子供達が楽しむ時間を奪ってしまう。 ・会議をする上で、情報を提示する側は、<u>誰もがわかりやすい説明をするのはもちろん、聞く側もメモを取りながら聞いたり、事前にわからないところを書き出しておくなど、話し合う上で色々な工夫することが、とても大切だということを感じた。</u> 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 情報共有の手段として Facebook の活用 2. 渡航前：情報発信、情報収集と内容の把握 3. 前日までに、不明点は担当に問い合わせて理解し、情報共有を密にしておく 4. 全国学生が集まる会議に臨む際、主体的参加の大切さ

出所：F「カンボジアボランティアに参加して学んだこと」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

本プロジェクトの全国からの参加学生が、Facebook を活用して、情報発信しあう。一定の条件を満たせばアクセス可能な SNS であるが、それを、有用なコミュニケーション・ツールとして活用するためには、取り扱う個々人の主体性や管理責任が問われてくる。F の記述によれば、各参加者が主体的に情報を収集・整理し、現地で即座に活用できるように、事前に準備する必要性が提起されている。

先の表 9 でもみられるように、全国からの参加学生どうしは、それぞれ自律した主体として対等な関係であり、それに伴う自己管理能力が問われているのである。こうした点を、本プロジェクトの参加経験を通して学びとり、自分自身の言葉で表現しているところに、重要な学びの契機があるといえよう。

2) 他大学の学生との協働を通して学んだこと

第2の理論的課題は、「他大学の学生との協働を通して学んだこと」である。これに関して、①「学生が主体となって活動することの意義」、②「他大学の参加学生との出会い」の2つの観点から、意味内容を検討していく。

① 学生が主体となって活動することの意義

表11は、北部班で活動した学生Eによる自由記述を示し、筆者による「要約」を付したものである。表11によれば、前述のとおり、本プロジェクトは、1)Facebookを通じて全国の学生と繋がりを進めていくこと、それゆえに「顔を合わせることがほとんどなく文面上のやり取りに戸惑いを感じながらも」渡航したとしている。しかしながら、2)現地では、一緒に活動することから協働関係が構築されたとする。そして、3)「いろいろな場面でリーダー役をしていく場面が振り分けられること」から、実際に自身がリーダーを担当することで「責任感が生まれ、今度は「他の場面」におけるリーダーを「助けてあげたいと思う気持ち」になり、「積極的活動に繋がっている」としている。

ここで、3点目に記述される「リーダー経験を通じた学び」が、重要な提起である。なぜなら、ここには、J. スピラーン (James P. Spillane) による「分散型リーダーシップ (distributed leadership)」実践の生成が読み取れるからである¹¹⁾。すなわち、状況に応じて「リーダー・フォロアーの関係が転換」するような実践と、それを可能とするメンバー間での「相補的」な関係の構築がめざされている実践といえよう。

表 11 学生が主体となって活動することの意義

E (北部班) の自由記述より	要約
<ul style="list-style-type: none"> ・このプロジェクトは13大学の学生がFacebookというSNSを通じて繋がりを進めていきます。顔を合わせることがほとんどなく文面上のやり取りに戸惑いを感じながらも指導案、現地での動きを確認し不安も残しつつ渡航しました。 ・しかし、現地では一緒に活動していくことでお互いが刺激を受けて率先してこのプロジェクトを成功させるために意見を出し合うことができました。 ・いろいろな場面でリーダー役をしていく場面が振り分けられることで、自分が動かなければという責任感が生まれ、リーダーを経験することで他の場面で助けてあげたいと思う気持ちになって積極的活動に繋がっているのかなと感じました。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. Facebookを通じた全国の学生との繋がりと活動 2. 一緒に活動することから生まれる協働関係 3. 分散型リーダーシップ実践を経験

出所：E「カンボジア報告書」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

② 他大学の参加学生との出会いー人間としての幅を広げる機会

表12は、シムリアアップ班で活動した学生Bによる自由記述を示し、筆者による「要約」を付したものである。

表 12 他大学の参加学生との出会いー人間としての幅を広げる機会

B（シエムリアップ班）の自由記述より	要約
<ul style="list-style-type: none"> ・他大学の参加学生との出会いも私の人間としての幅を広げることができる機会になった。 ・カンボジアでの活動は学生主体活動である。他大学学生は、<u>渡航後の活動について、団体全体について、また、この活動の意義についてそれぞれ個人が強い意志を持ち活動に取り組んでいる。</u> ・各大学で、幼児教育、小・中・高各学校の教育と学んでいる<u>専門分野は様々であるが、カンボジアの学校教育の向上という1つの目標に向けて参加者全員の知識、経験のその全てをフル活用し、毎日の課題に向き合い1週間を過ごすことができた。</u> ・他大学学生との協同や対話から、<u>教育に対する視野の広がり、私自身の考察の視野、ものの見方・考え方を見つめ直す機会にでき、私の良さ・欠点を見つめることができたとも感じている。</u> 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 他大学の参加学生との出会いー人間としての幅を広げる機会 2. 学生主体の活動：一人一人が強い意志を持ち活動に取り組む 3. 1つの目標に向けての参加者全員の知識・経験をフル活用 4. 自分自身のものの見方・考え方を見つめ直す契機

出所：B「カンボジア渡航を通して、私が学んだこと」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

表 12 によれば、「他大学の参加学生との出会い」が、自身の「人間としての幅を広げる機会」になったとする。1)「カンボジアでの活動は学生主体活動」で、「渡航後の活動」「団体全体」「この活動の意義についてそれぞれ個人が強い意志を持ち活動に取り組んでいる」としている。2)「カンボジアの学校教育の向上という1つの目標に向けて参加者全員の知識、経験のその全てをフル活用」して協働したとする。こうした学生相互の協働と学び合いを通して、3)「教育に対する視野の広がり、私自身の考察の視野、ものの見方・考え方を見つめ直す機会」になり、「私の良さ・欠点を見つめることができた」としている。

状況をよく観察し、他大学の学生からも学びながら、「この活動の意義について」、自分自身も「強い意志を持ち活動に取り組んで」きた様子が読み取れる。B にとってのカンボジアでの活動を通した学びには、「相互作用的に道具を用いる」、「異質な集団で交流する」、「自律的に活動する」というキー・コンピテンシー¹²⁾が探究されているといえよう。

3) ボランティアの「意味の再構築」

第3の理論的課題は、ボランティアの「意味の再構築」である。これに関して、表 13 では、①「現地に行くことの意義」、②「ボランティア・貧困についての意見を持つこと」という小テーマを挙げた2名の記述を基に、「経験の意味の再構成」をたどってみる。

表 13 によれば、B（シエムリアップ班）と E（北部班）の両者に共通して、「経験の意味の再構成」¹³⁾過程を読み取ることができる。1) 両者ともに、渡航前のボランティア経験はなく、さらに、B においては、自身の「ボランティア観」があった。次に、2) 現地の子どもたちとのかかわりを通して、新たな問いが生じている。さらに、3) ボランティアの「意味の再構築」、4) カンボジア支援を通した、自分自身にとって「経験の意味」が「増加」している。

B においては、Q1「カンボジアの子どもたちは、貧困なのでしょう吗？日本に比べれば明らかに貧困でしょう」、Q2「では、不幸なのでしょう吗？何をもって幸せなのかを考えるのは答えのない問題になってしまいますが、すくなくとも私が見てきたカンボジアの子どもたちは幸せそうな顔をしていました」、Q3「これらをふまえて、今の私が、『支援は必要か？』と聞かれれば答えは、『必要

だ』と答える」というように自問自答を展開している。他方、Eにおいては、Q4「日本は便利だけれど、何かに興味を惹かれて自分を全開に出して楽しむことはできていない人が多いのではないか？」という問いを発している。

Bによる「何をもって幸せなのか？」という問いと同様に、Eによれば、一見「便利」に思える日本において、人々はみな本当に「幸せ」を追求しているといえるのか？「豊かさ」の意味を問い直すとともに、「みえない」文化的価値の「貧しさ」への根源的な問いが提起されている。

なお、Eは、別の小テーマとして「ボランティア活動の多様な形」を挙げて、表14のように述べている。要約すれば、1) ボランティア活動の形は、寄付だけではないこと、2) 現地の子どもが今までにない経験や知識を得ること、3) 体育などの人との関わりができる教科特性を活かして、「相手を思いやる心が生まれてくる」ことも、「ボランティア活動の形」に含まれるとしている。こうした、現地の子どもたちの状況やニーズに呼応した、参加者自身のかかわりそのものが、双方向的なボランティアの多様な形態を創り出すことが示唆されている。

表 13 ボランティアの意味の再構築

経験の意味の再構成	B (シムリアップ班) 「ボランティア・貧困についての意見を持つこと」	E (北部班) 「現地に行くことの意義」
1. 渡航前の「ボランティア観」	私は、大小を問わずボランティア活動に参加したことがありませんでした。理由はボランティアという行為が嫌いだったからです。その理由は、支援者が一方的に（押しつづける）支援をしているイメージがあったからです。それは、本当に困っている人、子どもたちを見たことが無かったともいえるかもしれません。	ボランティア活動をしてみたい、海外に行ってみてみたいという気持ちがあったけど、なかなか行動には移すことができていませんでした。
2. 現地の子どもの様子のかかわりを通しての新たな問い	Q1 カンボジアの子どもたちは、貧困なのでしょう？日本に比べれば明らかに貧困でしょう。 Q2 では、不幸でしょうか？何をもって幸せなのかを考えるのは答えのない問題になってしまいますが、すくなくとも私が見てきたカンボジアの子どもたちは幸せそうな顔をしていました。 Q3 これらをふまえて、今の私が、「支援は必要か？」と聞かれれば答えは、「必要だ」と答えるでしょう。	しかし、今回参加してみて実際に裸足で歩いている子どもたちと触れ合ってみて、何もないけれど本当に楽しそうにしている姿をみて、自分の力は少ないけれど、きて良かったなと思いました。 Q4 日本は便利だけれど、何かに興味を惹かれて自分を全開に出して楽しむことはできていない人が多いのではないかと感じました。
3. ボランティアの「意味の再構築」	カンボジアの子どもたちを支援することには、メリットとデメリットどちらもあります。考えられるデメリットは、支援に依存してしまうこと。私たちが与えるだけの関係下での成長は一過性のものになってしまいます。 カンボジアでの持続可能な成長のための支援を続けることで最終目的に向かっていかなければなりません。	言葉の違い、文化の違いはあるけれど、同じ人間であるなどわかっていたつもりだったけど痛感させられたような気持ちになりました。この気持ちは、聞くだけでは伝わらないし、自分で経験をするのが大事だなと思いました。
4. 自分自身にとっての「経験の意味」	このように、カンボジアでの支援を通じて、自分の意見を明確にすることができたのも成長だと思っています。何もやってみないことには話せないし考えることもできません。 自分の意見を持つこと。薄い意見ではなく、実際に見て、活動してきただけの意見が今は持っていると認めています。この活動に参加したことで得た大きな成長です。	このプロジェクトに参加させてもらえて、カンボジアの子どもたちのために活動しに行ったけれど、逆に元気をもらったり、いい経験ができて自分の為になったなと思います。

出所：E「現地に行くことの意義」、B「ボランティア・貧困についての意見を持つこと」の自由記述を元に、藤岡恭子作成（下線、「経験の意味の再構成」および「Q1～Q4」加筆：筆者）。

表 14 ボランティア活動の多様な形態

E（北部班）の自由記述より	要約
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の形は寄付だけではないのだとこのプロジェクトで感じました。日本の教育が、カンボジアの子どもたちに合うのかまだわからないと考えなければならないことはたくさんあると思います。 ・だけど、日本人が行くことによってカンボジアの子どもたちは今までにない経験をしたり知ることで、何か興味を持てるが増えるきっかけになったりするのではないかなと思う。 ・体育など、副教科には人との関わりができる教科であると思います。そこで行われることで、相手を思いやる心が生まれたりすると思います。 ・ものをもらうだけではなく、目を見て直接渡すことで気持ちも少しでも受け取ってもらえるのではないかなと思うし、必要なボランティア活動の形が行くことで見えてくるなと感じました。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動の形は、寄付だけではない。 2. 現地の子どもが今までにない経験をしたり、新しい知識を得ること 3. 体育などの人との関わりができる教科特性を活かす。相手を思いやる心 4. 双方向的なボランティアの形

出所：E「カンボジア報告書」の記述データを元に、藤岡恭子作成（下線および要約：筆者）。

3. 結語－参加学生にとっての「経験の意味」の考察－

本稿では、「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」の教育的意義について、参加学生による「学び」の質に着目して、その「経験の意味の再構成」過程を検討してきた。本稿で明らかになった、参加学生にとっての「学び」の特徴として、次の3点を指摘することができる。

第1の特徴は、参加学生がそれぞれに、自らの実践経験を通して、「次なる実践的課題」を提起している点にある。さらに、本稿では、参加学生6名の記述を総合的に分析したところ、学生による協働的実践の全体論的ストーリーが浮かび上がった。すなわち、ここでの「経験の意味の再構成」過程は、参加学生の協働により創出される、①「状況との対話」、②「行為の中の知」を結集した、「行為の中の省察」¹⁴⁾のプロセスをたどっている点である。

具体的に提起されている実践課題の1)「現地の子どものに伝えることの難しさ」では、①「言葉の壁と意思疎通の難しさ」→②「言葉の壁を乗り越える努力・工夫」→③「伝えるためのいろいろな手段の考案」というストーリーがある。実践課題の2)「異文化の中での水泳指導を通して学んだこと」では、①「カンボジアの子どもたちの様子－『泳ぐこと』のイメージの違い」→②「現地の子どものニーズに合わせた『命を守る水泳法』指導への変更」→③「残された課題」である。実践課題の3)「体育・教科外教育の必要性」では、①「教材と向き合うこと・教材研究」→②「体育の授業における創意工夫」→③「体育・教科外教育の必要性」が導かれている。

これらの協働的実践の文脈では、①状況把握から始まり（＝「状況との対話」）、②状況に即した「修正」や「創意工夫」（＝「行為の中の知」と「行為の中の省察」）を通じた実践と、③実践後の省察という連続性を指摘することができる。

第2の特徴は、上述したような「次なる実践的課題」を提起するにとどまらず、「次なる理論的課題」を提起している点にある。この点、「実践」が「理論」を生み出し、その新たな「理論」を次なる「実践」に活かすとする、理論と実践の往還が示されている。

ここで特筆すべき点は、理論と実践の往還という方法論にとどまらず、自身の人間発達における「経験の連続性の原理」¹⁵⁾が、学生の記述をもって示されている点が第3の特徴である。

具体的に提起される理論的課題の1)「渡航前の準備段階で大切なこと」では、①「計画の重要性」、②「情報共有の大切さ」によって説明されている。理論的課題の2)「他大学の学生との協働を通して学んだこと」では、①「学生が主体となって活動することの意義」、②「他大学の参加学生との出会い＝人間としての幅を広げる機会」によって説明されている。理論的課題の3)「ボランティアの意味の再構築」では、①「現地に行くことの意義」、②「ボランティア活動の多様な形態」、③「ボランティア・貧困についての意見を持つこと」によって説明されている。

とりわけ3)「ボランティアの意味の再構築」では、参加学生による自問自答が展開され、ボランティアの「意味を再構築」し、自分自身と他者との「連携的な生き方の様式」¹⁶⁾を探究する学びとなっている点が重要である。

結びにかえて、学生主体の活動で展開される本プロジェクトにおいて、参加学生の協働により創出される教育的意義を、3点にまとめて指摘したい。

第1に、参加学生による「リーダー経験を通じた学び」は、「分散型リーダーシップ」実践¹⁷⁾の具体例を示している点にある。すなわち、状況に応じて「リーダー・フォロアーの関係が転換」するような実践と、それを可能とするメンバー間での「相補的」関係の中で、多様な共同リーダー態勢が創り出されている点に、教育的意義がある。

第2に、他大学の参加学生との協働的活動および、現地の子どもたちとの異文化交流を通して、「相互作用的に道具を用いる」、「異質な集団で交流する」、「自律的に活動する」という国際標準のキー・コンピテンシー¹⁸⁾を、「為すことによって学ぶ」機会になっている点である。

第3に、参加学生による協働の組織化を通して、個々の参加学生の知識や経験を結集しながら、その総体として「理論と実践の往還」という教育方法論が探究されている点に意義がある。さらに、個々人の人間発達における「経験の連続性の原理」¹⁹⁾が、自らの「生き方」の探究につながっていることである。すなわち、デューイのいう「実験的・協働的知性」²⁰⁾の協働的探究による、民主的な人間関係や文化の創造の実現をめざす教育実践が、本プロジェクトに内在している点に教育的意義があるといえよう。

最後に、参加学生による、さらなる「経験の意味の再構成」としての新たな自治的活動の展開が、現在進行している²¹⁾。こうした「経験の絶えざる再構築」²²⁾の実践について、あらためて稿を起こして論述していきたい。

(藤岡恭子)

〔注〕

- 1) John Dewey, *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, 1916 (re-publication of the revised edition 2004, by Dover Publications, pp.73-74) (松野安男訳『民主主義と教育』岩波書店, 1975年, 127頁) .
- 2) John Dewey, *Experience and Education*, Kappa Delta Pi, 1938, p. 35 (市村尚久訳『経験と教育』講談社, 2004年, 47頁) .
- 3) John Dewey, *Liberalism and Social Action*, 1935 (Prometheus Books, 2000, p. 92).
- 4) John Dewey, *op. cit.*, 1916, p. 83.
- 5) 海野勇三, 入江航生「カンボジアの子どもたちに学校体育を：北部チョンカル村での運動会開催の試み, 山口大学国際協力活動推進プラットフォーム 2012 年度活動報告」, 2012 年, https://www.iassc.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/kokusai/platform/pdf_20131419/20130419_2.pdf, 2019 年 4 月 27 日アクセス.
- 6) 海野勇三「カンボジア北西部チョンカル村における国際教育推進協力事業：2014 年度運動会プロジェクト活動報告」2015 年, <https://www.iassc.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/kokusai/platform/pdf/20150413/4.pdf>, 2019 年 4 月 27 日アクセス.
- 7) af SPLE Japan, 平成 29 年度活動報告書「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」, p.1.
- 8) John Dewey, *op. cit.*, 1916, pp.73-74. John Dewey, *op. cit.*, 1938, p. 35.
- 9) カンボジア渡航 (2018 年 12 月) を振り返り, 本学参加学生 6 名より, 2019 年 4 月 1 日付でレポートを提出してもらった。
- 10) Donald A. Schon, *The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action*, Basic Books, 1984 (佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』ゆみる出版, 2001 年。柳沢昌一・三輪建二訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房, 2007 年) .
- 11) James P. Spillane, *Distributed Leadership*, Jossey-Bass, 2006.
- 12) ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク著・立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』明石書店, 2006 年, 202 頁。
- 13) John Dewey, *op. cit.*, 1916, pp.73-74.
- 14) Donald A. Schon, *op. cit.*
- 15) John Dewey, *op. cit.*, 1938, p. 35.
- 16) John Dewey, *op. cit.*, 1916, p. 83.
- 17) James P. Spillane, *op. cit.*, 2006.
- 18) ドミニク・S・ライチェンほか, 前掲。
- 19) John Dewey, *op. cit.*, 1938, p. 35.
- 20) John Dewey, *op. cit.*, 1935, p. 92.
- 21) 本学参加学生 6 名 (4 年生) により, 次期渡航につなげるために, 在学生対象に, 今回のカンボジア・プロジェクトの報告会が実施された (2019 年 5 月 7 日, 8 日, 9 日)。
- 22) John Dewey, *op. cit.*, 1916, p. 73.